

地元学を実践して

「知ろうとしなければなにも見えてこない」

2014 東京財団週末学校
広島県尾道市 倉田 麻紀

地元から出たことないのに地元学？

そもそも私は、今まで 11 日以上、自分の生まれた地域を離れたことがない。しかもたった 3 年前の 11 日間のとある研修プログラムが離れた最長記録だ。

だから、地元生まれ、地元で育ち、地元で就職し、地元で家庭を持った自分が今さら地元学？と正直思った。

地元学の課題は、地元学の講義を受ける前から出されていた。吉本哲郎先生の地元学の課題図書を参考に、50 人にインタビューを行い、お一人分の一代記を作成するというもの。

地域に入り、インタビューすることには何の抵抗もなかったが、そんなこととして、いったい今さら新しい発見があるのか？と思いながら始めた。

インタビューで拌まれて

始めてみると、それは驚きの連続だった。早とちりで少々質問項目を間違えていたのだが、質問する主旨を伝え、好きな場所、好きな食べ物、地元を色に例えると？とのいくつかの質問をすると、皆とても真剣に考えてくれた。その考えてくれる姿勢に驚くとともに、感動した。（くだらない、と答えてもらえないかちょっと心配だった）

ある限界集落（2 世帯しかない集落）でインタビューしたとき、その家のお母さんは、「ありがとう、ありがとう」訪れた私たちに手を合わせ、そして家に向かって手を合わせた。「こんなにたくさんの方が家に来てくれて、先祖が喜んどるよ、ほんまにありがとう」

そして、その家のお父さんは好きな食べ物に、お母さん作の穴子と炊いた蕎麦だと答え、きっと二人分しかなかったであろう、その蕎麦を出してきてくれた。そして嬉しそうに「な？おいしかろうが」と目を細めた。

誰よりも、地域での暮らしと家族を大切に最後の 1 軒になっても残っている、お父さんとお母さんの深い、とても深い思いに触れた。

もっとこの地域を知りたい。そう思わされた出来事だった。

一代記、運命の出会い！？

インタビュー時に、すごくポジティブなお母さん（83 歳）に出会い、初対面だったがくわしく聞きたくなったので、後日改めて話を聞かせて欲しいと、約束をして伺った。

3 時間半、話は尽きなくて、人生楽しいことばかり、なんでもやってみにゃあのと、すすめの学校がやりたいんよ、皆が遠慮なく、いつでも集まれる場所を作りたいんよ、とお話しの最後にこれからやりたい夢を嬉しそうに語ってくれた。

まとめるのにはさらに 3 日ほぼ徹夜したが、お母さんの前向きでチャレンジを続けている、今なお現在進行形の人生は面白くて、小説を書いているようで楽しかった。コンパクトに話をまとめるのも技術だろうが、削って削って 13 ページが精いっぱい。

一代記がきっかけで、ときどきお母さんのお宅を訪ねるようになった。先日お邪魔したらなんと夢をかなえていた。今月からすずめの学校を開くそうだ。「皆今まで苦労してきたんじゃけえ、これからは楽しみにゃあの！集まって体操してから遊ぶんよ。」ほんとに有言実行、感服である。

やはりふるさとかな

最初の10人近くは自分の地域とは離れた山間部だったが、他地域での故郷への想いに触れたことがきっかけで、なんだか本当の地元で聞いてみたくなり、あとは自分の住んでる地区と生まれた地区で行った。

一番好きな場所は？庭から見る海、畑から見る海、うちの近くの〇〇海岸、と答える。不便だけど島がええ。よそへは住めん。「嫁に来た頃は橋がないけえ、実家に逃げられもせん、島流しにあったんじゃ」とも言っていたお母さんたちの言葉だ。

そうだなあ、確かにいいところかもしれない。当たり前にあるから、なんとも思っていなかったことに、自分自身が気付いたインタビューとなった。

絵地図

一代記やインタビューをしていたら、自分の故郷の島を見直したくなったので、とりあえず島を一周して、いいところや不思議に思ってる場所などの写真を集めることにした。

かつては、みかんの島と言われた島だ。みかん山から歩いて海側にある別の畑に抜ける道があったので、30数年ぶりに歩いてみようと思いついた・・・が、危うく遭難するところだった。かつてのみかん山は雑木といばらに覆われた森になり、みかんなど影も形もなく、昔、祖母と歩いたはずの道の跡をトゲで血だらけになって、やっとの思いで海に抜けた。

ああ、これが今の故郷の現実なのか。耕作放棄地を体で思い知った。そして、今あるもの探した！と、島の歴史と不思議の解明に乗り出すことにして、サロンに行く。私を小さいころから知ってるじいちゃんばあちゃん達が集まっている。

川の無い島なのに道路に面した家はなぜ石垣が高いのか、今は田はないが昔はあったのか、どこまで海だったのか、質問しながら思い出話も聞く。電気が初めて来たときのこと、もやい、船でミカンを運んだこと…。話は尽きなかった。話をしてくれる、みんなが楽しそうだった。翌日も尋ねると、待ち切れずに思い出したことがあるんよ、とさらにくわしく教えてくれた。

ふるさとにあるもの

川がないのに上手に山からの水を溜め、わずかでもお米を作っていた島。橋が昭和40年代になってかかるまでは、大八車が通る道さえ、3本くらいしかなかった島。その島で、開墾できるところは山の頂上付近まで開墾し、みかんを栽培しみかん御殿と言われる家を建てた島の人たち。現在はわけぎ生産・出荷日本一の島、いわゆる高齢者でも年間100万位はわけぎで稼ぐ。地域の資源を有効に活用しながら、精一杯働く、働き者の島の人たちこそが、今なお続く宝なんだと、強く感じる事ができた地元学だった。